



## ーこんな疑問・質問って、あり?・・・それ, “スッキリ” させましょう! Part1ー

これまで巡回各校(本務校・兼務校)において、一定時間を確保した校内研修を様々な形で行っていただきましたが、その中で先生方から出された多くの疑問・質問に、十分な時間をとって説明できずにここまで来てしまったかと思えます。

先日海陽で行った校内研修でも、多くの先生方から様々な疑問・質問をいただきました。この機会にそれらを整理し、優先的にお伝えしておいた方がよいと思われることから、この通信で述べていきたいと思えます。

それでも十分ではないかもしれません。そのときはぜひ、直接お話して「スッキリ」させましょう。

### ■ Q1: そもそも“活動”と“教科”, “素地”と“基礎”って、どう違うの?

現在公立小学校で行われているのは、外国語「活動」であり、その目標は「コミュニケーション能力の素地を養う」というものです。一言で言えば、「日本語ではない言葉(英語)であっても、自分の思いや考えを伝え合える、お互いにコミュニケーションを図ることができるということを体験する」ということです。

週1時間の積み重ねで、不十分ながらも獲得した言語材料を用いて相手とコミュニケーションを図ることによって、「日本語でなくても自分の思いや考えは伝え合うことができるんだ」「友だちと会話するって楽しいものなんだ」と「体験する」ことに大きな意味があるのです。

これに対し「教科・基礎」というのは、明確に学習の対象が「英語」という言語となり、その「英語」を学ぶ初歩の段階が「基礎」ということです。

「『外国語活動』という『助走』を経て中学校の本格的な英語教育につなげている」と理解してはいかがでしょう。

### ■ Q2: クラスルーム・イングリッシュ(教室英語)を増やしてと言われるけど!

まず、外国語活動の時間に行われる中心的な言語活動は「英語で」です。ここも「日本語で」では困ります。

例えば、Q: What color do you like? A: I like red. というQ&Aを、「何色が好き? うーん、赤が好き!」とはしませんね。1 単元4時間ないし5時間を使って、英語表現を獲得させる活動を積み重ねます。そうして獲得した表現を用いて単元末のタスク活動を行います。

このとき、授業全体を進行する、あるいは言語活動のやり方を説明したり指示したりするときに、指導者はどこまで英語を用いるかということに対して、「疑問・質問、あるいは心配・不安」を感じられる先生方が多いようです。

結論を言うと、「英語を話せなくてもいい」とは言えないと思います。(Compass No5 も参照ください。)

先月実施した「グローバル化に対応した英語教育指導力向上研修」においても、第1セッションは「教室英語」です。以前紹介した、北海道教育大学小学校英語指導者資格認定講座でも、英検2級またはTOEIC550以上の英語力が求められています。この数値はおおよそ「高校卒業程度の英語力」であり、易しいレベルとは言えないと思います。

では、高卒程度の英語表現をスラスラ用いながら外国語活動の授業を行うことが求められているかと言えば、現実はどうでもありません。いわゆる中学校英語ぐらいまでの文法で、short・simple・easy な表現が多いのが実態です。Go ahead. (どうぞ/やっさい) Here you are. (はいどうぞ) など、ネイティブの人たちが子どものころに家庭で覚えるようなフレーズも多いです。それらにジェスチャーを加えた「short・simple・easy な教室英語+ジェスチャー」で外国語活動の授業を進行していくイメージがよいと思います。

これに、各単元で設けた身近な場面における英語を使ったコミュニケーション活動が合わさって、上記1の目標を達成していくと考えればよいでしょう。

次に、教室英語が大事だということは分かっていたけど、「どう増やすか」ですね。

残念ながら魔法はありません。やはり研修機会を捉えたり、自身で努力したりは必要だと思います。そうしながら、少しずつ増やしていくことを目指しませんか。

「教室英語」はもちろん、様々なことを学ぶ研修情報もできるだけお伝えします。ちなみに、今から最も近いものとしては、室蘭市教育研究所の1月10日(火)の研修講座があります。今年度は、「単語や表現の学習」と「アルファベット」がテーマになっています。特に、「単語や表現の学習」については、「活動を説明したり進めたりするときに見える英語フレーズ」も紹介しながら研修したいと考えています。

今回の話ともつながっています。「グローバル化に対応した英語教育指導力向上研修」の第3セッションにも関連しています。いかがでしょうか。ぜひ参加をご検討ください。

今回は文字ばかりになりました。申し訳ありません。続きはまた次号で。